

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.61

2024.02



BLUE FLAG Japanサミット2023 実施報告書

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会
NPO法人湘南ビジョン研究所

実施概要

名 称 第5回 BLUE FLAG Japan サミット 2023
～海を守り、未来をつくる～

開催日時 2023年12月17日(日)午前 8 時30分から11時30分まで

開催場所 オンライン形式 (Zoomを使用)

目 的 国内11都市のブルーフラッグ認証海岸・マリナーの関係者が一堂に会し、認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有するとともに、国内におけるブルーフラッグ認証地域の普及による海辺からのSDGsの実現に貢献する。また、ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を挙げた個人・団体を表彰する「第2回日本ブルーフラッグ協会賞(主催:一般社団法人日本ブルーフラッグ協会)」の授与式を行う。

実施内容 開会 / 主催者挨拶
第1部 基調講演
第2部 活動紹介
①興津海水浴場
②小田の浜海水浴場
③サンオーレそではま海水浴場
④ 菖蒲田海水浴場
第3部 研究報告
第4部 第2回日本ブルーフラッグ協会賞授与式
第5部 ブルーフラッグ取得を検討される方向け説明会
閉会

主 催 一般社団法人日本ブルーフラッグ協会

共 催 NPO法人湘南ビジョン研究所

参加者 約50人

開会 / 主催者挨拶

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会 代表理事 片山清宏

《Profile》 藤沢生まれ。厚木市役所、イギリス・スウェーデン海外研修派遣、神奈川県庁を経て松下政経塾に入塾。2011年NPO法人湘南ビジョン研究所を設立、理事長に就任。海の環境問題に取り組む。2020年「かながわ地球環境賞」受賞。慶應義塾大学SFC研究所上席所属、総務省地域創造アドバイザー



片山清宏 (日本ブルーフラッグ協会)

みなさん、おはようございます。本日は、北は岩手県から南は沖縄まで、日本全国から多数の方にご参加いただき、ありがとうございます。

本サミットは、国内11地域のブルーフラッグ認証海岸・マリナーの関係者が一堂に会し、認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有することで、ブルーフラッグ認証地域の普及と、海辺からのSDGsの実現に貢献することを目的としています。

本日は、Z世代の新しい海の環境活動をご紹介いただく基調講演や、ブルーフラッグを今年の5月に取得された4か所の海水浴場の事例発表、海外のブルーフラッグについての研究報告、そして、日本ブルーフラッグ協会賞の表彰と盛りだくさんの内容となっております。ご登壇いただきます発表者の皆さま、本当にありがとうございます。

ブルーフラッグは1985年にフランスで誕生。特にヨーロッパでの認知度は高く、ブルーフラッグビーチは「きれいで、安全安心で誰もが楽しめる優しいビーチ」として、多くの人々がバカンスに訪れています。

2023年11月現在、世界では51ヶ国、5,036ヶ所が取得。国内では、今年、宮城県気仙沼市「小田の浜海水浴場」、南三陸町「サンオーレそではま海水浴場」、七ヶ浜「菖蒲田海水浴場」、千葉県勝浦市「興津海水浴場」の4カ所が新たに認証され11ヶ所になりました。2024年度に向けては、岩手県陸前高田市「高田松原海水浴場」、大阪府貝塚市「二色の浜海水浴場」の2カ所が申請中で、審査を無事に通過すれば来年5月に新たにブルーフラッグに認証される予定です。

本日は、多くの皆さんとブルーフラッグについて情報共有し、意見交換をさせていただければと思います。どうぞよろしく願います。

第1部 基調講演

「Z世代が切り開くサステナブルな社会～
海の環境問題の解決に向けた創造的な活動
とは」

一般社団法人サステナブル推進協会 NAMIMATI 代表理事 齋藤 克希氏

《Profile》鎌倉在住。日本外国語専門学校卒業後、高級アパレルブランドに就職。社会課題への関心から退職し、2020年任意団体を設立。2022年6月にサステナブル推進協会NAMIMATIへと名称を変え、代表理事に就任。Z世代を中心に関東・関西・東海・シアトル支部合わせて200人以上のメンバーが活動。



■活動を始めたきっかけ

私は湘南で育つ中でたくさんさんの海の問題を目にしてきました。日本にはさまざまな文化、歴史があり、島国のため海にはとても馴染みの深い国です。そんな中、私は湘南で育ち、子供の頃から海と共に育ってきました。週末になると父が湘南の海を自転車で駆け回り、サーフィンや釣りに連れて行ってきていたのを覚えています。子供の頃の私の目には、視野を超えて広がる、決して無くなることのない資源のように写っていました。海は永遠にそこであり、恵みを与えてくれるものだと思っていたのです。

しかし大人になるにつれ、目に写った海は形を変えていきました。湘南のビーチ稲村ヶ崎に広がっていた砂浜は今、岩肌が見えるまでに少なくなりまともに歩くことすらできません。私たちが過剰に二酸化炭素を排出し、いかに地球を窒息させているかも今では理解しています。自然は永遠に続くわけではなく、当たり前のものだと思っはいけない、と肌で感じるようにもなりました。海のような大いなるものが人間の手によって危険にさらされていること、それは想像しにくいですがそれが現実なのです。

私は仕事としてSUPスクールのインストラクターを行っていたことや、趣味でサーフィンを行っていることなどから、環境問題というものに触れ、ここ一年だけでも沢山の海の問題を知りました。だからこそNAMIMATIを立ち上げ、リアルな情報をもとに永遠に続く地球を目指して活動しています。

我々は何をすべきか、それはこれからの社会の大きな歯車を担う世代に向けての意識改革だと私は思っています。その世代はSNSを基盤に生活をし、その世代の成長と共に今後SNSというものはより一層社会に大きな影響を与えていくはずで、そんなSNSを

イティブの世代を筆頭に社会課題の解決に取り組むことが私たちの役割です。慈善活動だけでは終わらせず、CSR、CSVの形を創り上げることがNAMIMATIのミッションです。NAMIMATIは大小問わず、全ての行動が重要であると考え、地球と調和できる社会を目指していきます。

■若者が集まる社会貢献活動の土台を創る

まず私にできることそれは目の前のゴミを拾うことしかできませんでした。初めは、関心はあるもののゴミの拾い方、捨て方もわかるわけもなく、地域で行われているビーチクリーン活動に参加しました。その中で、ゴミを拾うという活動をしている素敵な方々を目にすると同時に、若者、私と同じ世代がいけないことに非常に課題を覚えました。これから社会に出て一番の歯車になるこの世代が社会課題に関心がない。もしくは関心はあるけどアクションが起こしやすい場所がないのではないかと。それであれば若者が社会課題に取り組みやすい環境を創ろうとNAMIMATIを立ち上げました。

しかし今まで通りの活動では地域の方々には集まっていなかったが、若者は集まっていなかった。同じやり方ではなく新たな取り組みが必要だと感じました。まずは若者の行動の本質を考えること。

若者の行動＝SNSということに気づきました。カフェやレストランを調べる、旅行先を選ぶのにもSNSでリサーチしてから足を運ぶという流れがあったのです。もしかしたらこの社会課題にもSNSの要素を全面的に出したら若者が集まるのではないかと。そんな着眼点からビーチクリーンイベントを企画したところ、初めてのビーチクリーンで若者が約60名もの学生が湘南のビーチに集まってくれました。

■見た目の本質と社会課題の本質

ビジュアルだけ良くて人の心までは動かさません。感動させることは難しいと思っています。だからこそ見た目の本質（SNSの要素）×社会課題の本質が大切だと思います。



上記の写真のように我々はポリ袋の代わりにコーヒーの豆が入っている麻袋を活用してクリーン活動を行っています。見た目もすてかっこよくスタイリッシュになる見た目への本質だけではなく、ここには社会課題の本質も組み込まれているのです。今この世の中で資源を大切にしようという流れがあるのは事実です。その中でせっかくなクリーン活動をしているのに参加者がスカスカのポリ袋を全員が持つ必要はないのではないかと考えております。せっかくな活動をしているからこそ、もったいないと感じておりました。だからこそ、コーヒーの豆が入っている袋は丈夫で繰り返し何回も使えるだけでなく、この袋でゴミを拾い最後は一枚のポリ袋にまとめることによって資源の削減にもなるという、見た目への本質と社会課題の本質の両方を実現したのです。

第2部 活動紹介

「ブルーフラッグ取得に向けた新たな取り組み」

①興津海水浴場

一般社団法人勝浦市観光協会
事務局長 西村真一氏



■東京駅から特急で約90分。過疎地指定の街

ブルーフラッグ認証取得においては、勝浦市が申請主体者、勝浦市観光協会が運営実施者となっています。わたくしから今年5月に認証頂きました千葉県勝浦市の興津海水浴場についてご紹介いたします。

JR外房線沿線にありまして、特急だと東京駅から約90分の距離にあります。人口は15,700人、過疎地指定をされており、少子高齢化で人口減少が続いている、そんな街です。市内には海水浴場が4箇所あります。今回認証された興津海水浴場は、一番西側に位置している4つ目の海水浴場となります。



両側からは堤防がせり出しており、海の真ん中の、色が少し濃くなっている所には人口岩礁がありまして、波を打ち消す効果があり、ほかの海岸が荒れている時も興津の海水浴場は非常に穏やかな状態がキープ出来る、そのような海岸です。

砂浜にはハマヒルガオが群生し、4月下旬から5月中旬にかけては、綺麗な花が咲き誇る景色がご覧いただけます。年々砂浜を

覆うように広がってきており、花が終わった後は、草がじゅうたんのよう心地よい感触となります。



東側の一角にアマモの群生地がありまして、平素は波が穏やかという状態からか、年々群落も広がってきており、全国的には貴重な植物ではありますが、海水浴場開設の際には、海水浴場エリア内のアマモは水中伐採を行って開設準備を行っております。

ただどうしても海水浴場期間も毎日アマモが打ちあがるので、地区住民で構成する興津観光協会の方々が、交代で毎朝清掃を行っております。これがかかなりの重労働でありまして、年齢も高齢化していますので、今後の懸念点ともなっております。

■ブルーフラッグ認証取得で整備したこと。

1.ブルーフラッグ推進協議会



ブルーフラッグの取得と同時に「ブルーフラッグ推進協議会」を立ち上げました。メンバーは市役所、地元興津区と興津観光協会、ライフセーバー、海の家組織である海岸売店組合、興津商店会、それに私ども勝浦市観光協会となります。ブルーフラッグを真ん中で持っている女性の方が照川勝浦市長です。

2.バリアフリー環境整備

興津海岸には以前より駐車場からの遊歩道に続いて、砂浜へ繋がるスロープが備わっています。今回の認証取得にあたっては、スロープを下った所からすぐに乗り移れるようにビーチマットをセッティングして、その横に仮設の多目的トイレを設置し、車椅子の方への利便性を図る事に致しました。ビーチマットは2本並列にして波打ち際まで伸ばしています。

3.ブルーフラッグ情報掲示板

情報掲示板は、台風など悪天候の時に、野ざらしで劣化がすぐに進まないよう、取り外して倉庫に格納が出来るようパネル形式に致しました。多目的トイレの壁に強力なマグネットで貼り付け

ています。下段部分の水質データの記載場所や、開設期間など書き替えが必要な箇所は所々空欄にして、ホワイトボード用のペンで書き込みが出来るようにしてあります。来シーズンにはこれと同じ形式のものをもう1枚制作して、駐車場から海岸に向かう入口にも取り付ける予定です。

4.ごみの持ち帰り

どちらの海水浴場にとってもゴミは非常に悩ましい問題かと思えますが、興津においては住民の皆様で協議の上、数年前からゴミ箱の設置をやめる事にしています。これによってゴミが激減したことから、ルーティーンの清掃は行った上で、今後においてもこの方針の元、海水浴場の運営を行っていく計画です。

■プロモーション活動



認証後のプロモーションについて少しご紹介します。先行して認証されていらっしゃる海岸の事例を参考にさせて頂いて、アーチ形の「のぼり」を作ったのと、興津地区に50箇所ある街路灯に、ペナントを通年型で設置を行いました。



PRとしては、SNS以外には、東京の山手線・総武線の大型駅構内へのポスター展開を行いました。この写真は渋谷駅コンコースのもので、新宿、渋谷、池袋エリアの主要駅や、JR千葉支社管内の主要駅に、夏の間ポスターやデジタルサイネージによってPRを行いました。

地元・近隣への周知には、市の広報誌や地元新聞による広報活動を行いました。お盆に地元で開催される興津で一番大きなイベントであります「宝探し」の時はイベント冒頭でブルーフラッグ取得宣言と意義についてお話頂くなどして市民への周知を図りました。宝探しの後には、同じ日の夕方から夜にかけて「灯籠流

し」と「花火」のイベントが続きます。今後はブルーフラッグと共に、こういった風情あるイベントの存在もPRして、認証の相乗効果を上げていきたいと考えております。

■合意形成のむずかしさを痛感

興津海岸でブルーフラッグ取得の前提条件であります合意形成までに至る経緯と、ブルーフラッグを取得する意味について少しお話ししておきたいと思えます。

勝浦市では、最近でこそ「100年猛暑日の無い街」として露出も若干は増えてはきましたが、3年前は勝浦と聞いてもイメージするものが非常に少ない状況で、そんな頃にブルーフラッグを知る機会を得て検討に入りました。

ブルーフラッグ取得の効果には、認証の4カテゴリーに関係する以外も含めて様々にあると思えますが、勝浦市における取得の狙いの1つとしては、多くの浜がそうであるように、まずはブルーフラッグを獲得することによる「海のブランド化」という観光的な狙いがあります。3年前に資料を初めて読んだときに、先行して認証取得された海岸の方々が、二次的な効果として「シビックプライド」が向上したと口々に報告されているのを拝見して、勝浦にとって重要なのはむしろこちらではないかと思い始めていました。郷土の誇りである「海」のことなら利害関係のある住民も1つになれるのではと思いつつブルーフラッグを目指していく事に決めました。しかし、その為の合意形成を得るのには、思いの外、高いハードルがありました。



2021年11月に初めて説明会を開きました。出席者は市内4つの海水浴場のあるそれぞれの地区の区長と観光協会長、海の家関係者、マリネジャー事業者、市議会議員などでした。この時には片山代表理事や江の島海水浴場協同組合の関係者の方に遠路お越し頂きました。誠にありがとうございました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

この説明会の時点では、市の中心に近い「勝浦中央海岸」での取得を想い描いており、説明会後のアンケートでもほぼ全員から賛同を得ることが出来ました。しかしその大半が、「近隣漁業者の合意はえられるのか?」という但し書き付きのものでした。勝浦は古くから漁業の街として形作られてきています。この説明会についても主旨の説明を事前に漁業者へ行いましたが、どうしても「環境」や「水質」というキーワードに対する抵抗感を持つ方もいらっしゃる様子で、会への出席は得られませんでした。申請までの短期間で漁業者からの賛同を得るといったハードルは非常に高く、結局、勝浦中央海岸での取得は断念致しました。その後、鶴原、守谷と順番に取得の提案をしていきましたが、それぞれ土地ごとの様々な理由があって、この2つの海水浴場でも更に断念せざるを得ない事態となり、合意形成という事の難しさを痛感することとなりました。

そうして最後に訪問したのが興津海岸でしたが、こちらでも当初は「自分達の浜へのメリットが感じられない」と冷ややかな回答でしたが、何度も訪問して、最終的には片山様にも同行してもらい、数多くの質問や意見に体を張って受けて頂き、ようやく最後の最後に「1年やってみるか」というギリギリの了承を得ることが出来ました。決まってい形での合意形成とは言い難いものではありませんでしたが、正直もう後が無いという気持ちもありましたので、何とか了承を得た!という事実の元に、本格的な申請に入っていた、そのような経緯がありました。

■人心が結集する為の旗印となるもの



その後のお話になります。この海岸の海水浴場開設準備は、いい加減にされたくないという理由で、業者任せではなく、地域住民からなる地元観光協会ではば作業が行われています。

ある時、そのうちのお一人が「俺たちも孫の世代に何か残していかなくやいけねえからよ」と、ブルーフラッグについて前向きな言葉を言われたと、人づてに聞いた時がありました。これが、ブルーフラッグにシビックプライドを醸成する力があると、身をもって体験した瞬間でした。

当初冷ややかだった態度は、認証取得後には一変して、ブルーフラッグを意識した活動をして頂いております。「興津が変わっていくね」と嬉しそうに声を掛けて頂いた事もありました。これこそがブルーフラッグを獲るもう一つの大きな意味であり効果ではないのかと思うところです。まだ海岸の活動に関わっている一部の人でしかないかもしれませんが、理想としては、ブルーフラッグに対して真摯に取り組む姿が人を動かし、そこに少しずつ外からも人が集まってくる。内外からの気持ちの結集がその土地に住む人たちにも自信とプライドを与えて、これから育てていく子供たちの記憶にも刻み込まれる。文字通り、そのように人心が結集する為の旗印となるものとして「ブルーフラッグ」の、もう一つの意義があるのではないかと感じております。

今回の私共での事例は、海岸側から持ち上がったブルーフラッグ取得ではなく、行政や市の観光協会側から海岸側への提案から始まったというところで、合意形成に紆余曲折を生んでおり、本日も視察中の各地皆様の事情とは異なるのではないかと思います。ブルーフラッグの海岸を持つ、育てていくという事を街や市の誇りと感じてもらえるよう、私共としては今後の活動も進めていければと思っております。

②小田の浜海水浴場
一般社団法人気仙沼市観光協会
千葉 光氏



小田の浜海水浴場 (宮城県気仙沼市)

【小田の浜海水浴場の紹介】

- 宮城県の最北端にある「気仙沼大島」は、気仙沼の観光客の約半数が訪れる島で、夏場は特に多くの観光客で賑わいます。
- 「小田の浜海水浴場」は地形的に遠道で遠く、乳幼児から安心して海水浴が楽しめるファミリー向けのビーチで、現在は東日本大震災の復旧工事も終了し、バリアフリー環境も整っていることから周辺地域でも最も来場者が多い海水浴場となっています。
- 2019年には大島開通したことにより、気軽に訪れることができる田舎らしい「秘境感」あるビーチにもなり、観光客が増加しましたが、新型コロナウイルスの影響で中止にもなりましたが、昨年から徐々に観光客数は伸びてきております。
- 2023年はブルーフラッグの取得を契機に期間を延長

小田の浜海水浴場 2023年 宿泊施設アンケート結果と経済効果 (推定値)

【小田の浜海水浴場 集計中の速報データ】

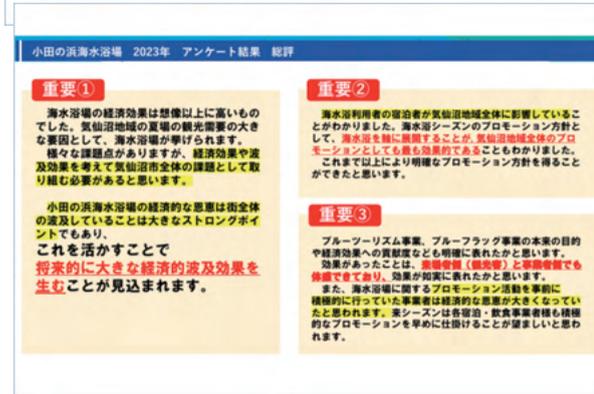
大島内、気仙沼市内の宿泊施設にアンケート調査を実施しています。気仙沼市内には4つの海水浴場がありますが、小田の浜海水浴場に特化した結果になります。ご調査いただいた宿泊施設の数に比例します。市内の大島ホテル以外の調査も実施しておりますので、実際の経済効果は下記の数字以上になります。

1 大島内で海水浴場周辺の宿泊施設 (有効回答: 5施設回答 / 6施設)	海水浴期間中の宿泊客: 321名	海水浴客割合: 全体の89% (全島の約半額)	宿泊経済効果: 2974万円 (客単: 大人1人、子ども1/2程度)
2 大島内全体の12以上の宿泊施設 (有効回答: 7施設回答 / 7施設)	海水浴期間中の宿泊客: 87名	海水浴客割合: 全体の19% (全島の約半額)	宿泊経済効果: 723万円 (客単: 大人1人、子ども1/2程度)
3 気仙沼市内の宿泊施設 (有効回答: 4施設回答 / 7施設)	海水浴期間中の宿泊客: 402名	海水浴客割合: 全体の21% (全島の約半額)	宿泊経済効果: 3894万円 (客単: 大人1人、子ども1/2程度)

宿泊事業の経済効果

7391万円以上!

*経済効果の算出については、大型ビジネスホテル、大型観光ホテルは算入していません。



- 地域全体の経済効果が波及効果が目に見えて表れ、海水浴場を起点とした地域経済の活性化へ期待ができる結果へと繋がった。将来的に持続可能且つ成長性のある経済モデルを示すことができている。結果的に地域経済を後押しするために海水浴場をビジネス的に活用していく契機にもなった。
- 今シーズンの海水浴場については、福島原発のALPS処理水の放出に関する観光の風評被害は現時点では殆ど影響が出ていないと思われる。ブルーフラッグの認証取得などのブランディング効果やプロモーション効果が上回っており、これまでの取り組みの成果が明らかになった。
- 海水浴場利用者だけではなく、寄付の依頼や経済界(水産・交通)や大学生、研究者などから問い合わせがあるなど、想定外のコミュニティ、ステークホルダーとの広がりが見えてきている。(参加型の意見が多い)
- 自主的にビーチクリーンを行う方が増えており、地元に限らず観光客の協力者も多くなっている。

③サンオーレそではま海水浴場
南三陸町商工観光課
課長 宮川舞氏



- ブルーツーリズム事業・ブルーフラッグ認証取得の成果と効果
- ブルーフラッグの認証取得により、地域住民や地域事業者との打ち合わせや会議の回数なども増え、会議や催事の参加者が増え、積極的な意見が自主的に生まれており、地域が協力して取り組む事業となってきた。シビックプライドの形成が目に見えてわかってきている。
- 様々な統計データやアンケートサンプルを獲得することができ、客観的な指標を得ることができ、評価ポイントや課題点などが明確になった。今後の対策方針が明確である。
- 様々なプロモーションを実施したことで、目的やターゲットにマッチしたプロモーションの在り方が明確になってきており、確実な効果に繋げることができている。

■地域との関わり

地域との関り

©2023 MINAMISANRIKU

はじめに、サンオーレそではまという場所が地域にとってどのような場所だったかをご紹介します。海水浴場周辺は、海水浴客の滞在を起源に海沿いの避暑地として民宿営業が拡大したエリアで、震災前までは十数軒が立ち並ぶ民宿街を形成していました。町にとっては、特に夏季シーズンの集客拠点でありました。

この場所が、2011年3月の東日本大震災により一変しました。被災者の生活・住宅再建が最優先であったため、観光関連施設は後発となりましたが、宮城県をはじめ、多くの関係各所の協力により、平成29年7月にリニューアルオープンした海水浴場です。震災以降は以前にも増して、地域の中に地域の資源を活用する動きが活発になってきました。例えば、地域の若者たちが企画した盆踊り大会のメイン会場になり、夜店が立ち並んだり、ビーチを活用したビーチバレーボール大会が開催されたり、アートプロジェクトの一環で、期間限定の木製メリーゴーランドが出現するなど、大人から子供まで海水浴以外にも親しみのある場所で、地域住民にとっては、ビジター向けの観光資源である前に、ふるさとの風景として色濃く記憶されている場所です。

■森里海ひと いのちめぐるまち 南三陸



次にサンオーレそではま海水浴場を取り巻く、地域の背景にも少し触れさせていただきます。南三陸町では、震災後、水産業や林業において、単に以前の形に戻すのではなく、次世代に繋ぐ産業の再生を目指して取り組みが進められてきました。林業では、平成27年に宮城県初となるFSC森林認証を取得し、水産業では、平成28年に日本初となる二枚貝(養殖牡蠣)でのASC国際認証を取得、また、平成30年には震災前から積み重ねてきた研究成果や、震災後の藻場の再生、そして世界に残すべき水鳥「コクガン」の飛来地として、志津川湾がラムサール条約登録湿地に認定されるなど、震災前にはなかった官民連携での新たな取り組みが、様々な成果に繋がっていきました。

このような流れを汲み、町ではまちづくりのビジョンに「森里海いのちめぐるまち」を掲げ、産業のみならずあらゆる生業に対して環境に負荷をかけず、持続可能なまちづくりを目指し、これを具現化させるため、令和4年度には、志津川湾保全・活用計画を策定しました。



この計画の中で掲げる将来像を目指し、各産業などにおいて様々な取り組みを行っています。サンオーレそではま海水浴場でのブルーフラッグ認証は、この将来像の中で、観光交流の側面から、このピラミッドの一端を担う手段のひとつとして、今回挑戦することになりました。



それではここからは、取得に向けた取り組みの一部を紹介いたします。まずは、カテゴリーの内の二つ、きれいな海、学びあえる海を目指す取り組みとして町が目指す将来像を、まずは地域住民に認識してもらい、その意識を向上して頂く必要があると考え、地域住民を対象とした、環境保全活動や環境保全講座を複数開催しました。活動では、その名の通りビーチクリーンを行い、そこで集まったゴミひとつひとつから現在のサンオーレそではま海水浴場や志津川湾の状況を紐解き、ひいては世界に繋がるこの海で、今何が起きているのか、という視点でビーチクリーン活動とセットで、屋外での講座を行いました。プラスチックごみの問題や海水温上昇がもたらす影響など、現状を知り、自分たちが今できることは何かを考える時間は、大人のみならず子どもたちにとっても非常に関心を引く内容で、真剣な眼差しで参加を頂きました。

人にやさしい海 安心して楽しめる海を目指して



©2023 MINAMISANRIKU

続いてカテゴリーの人にやさしい海、安心して楽しめる海を目指した取り組みとしては、日本ブルーフラッグ協会、湘南バリアフリーツアーセンターの皆様のご協力を頂き、海水浴場運営スタッフと共に、バリアフリービーチ講習会を開催しました。期間中アルバイト予定の高校生スタッフも参加し、モチチェアやモビマットの使用法、バリアフリービーチの運営などを基礎から学びました。安心安全対策としては、このようなソフト事業の他、トイレの段差解消工事なども行っております。

継続的な取り組み



前段にお話をさせて頂いたとおり、ブルーフラッグ認証取得の背景には、志津川湾の環境保全・活用計画があります。これを地域に浸透させ、ビジターの誘客につなげていくためには、海水浴場開設期間に限らず、継続的な取り組みが必要と考えます。スライドは、町の広報誌の一部ですが、座学のみならず、シュノーケリングやシーカヤック、SUPなどのマリンアクティビティを通じて、海洋環境を学ぶ企画も行っており、講座を通して新たにインストラクターの資格も取得された方もおり、将来を担っていく人材育成にも繋がっているものと思います。

このような取り組みを更に広く拡散していくため、今年度はこちらから出向いて講座を行う出前講座にも取り組みました。産業団体や企業など複数の申込があり実施しましたが、何より嬉しかったのは、地元小学校のPTAの方々からの依頼により実施した学校行事としての講座です。親子で学び、今日から家でも取り組めるワンアクションを持ち帰る、という主旨で、親子が同じ地域の課題を共有し、一緒に考える姿は、まさに私たちが目指すべき姿であったと感じていますし、教育の中での継続性を今後も重視し、これを南三陸の文化として定着を目指していきたいと考えています。

推進体制



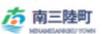
【計画・事業推進】 南三陸町商工観光課 南三陸町自然環境活用センター <input type="checkbox"/> 計画立案、予算措置 <input type="checkbox"/> 周知、募集、調整、施設整備等	
【環境教育講座】 一般社団法人 サステナビリティセンター <input type="checkbox"/> 講座カリキュラム構成 <input type="checkbox"/> 講師、講座運営、人材育成	【海水浴場運営業務受託事業者】 一般社団法人 南三陸町観光協会 <input type="checkbox"/> 海水浴場運営業務全般 <input type="checkbox"/> 情報発信
【インストラクター養成講座】 南三陸海のビジターセンター (環境省) <input type="checkbox"/> マリンアクティビティ体験講座 <input type="checkbox"/> 体験受入れ時安全管理講座	【情報拡散・協力】 南三陸商工会、JFみやぎ、JA 新みやぎ、南三陸森林組合 町内小中学校 (教育委員会)

©2023 MINAMISANRIKU

ここまでご紹介をさせて頂きました取り組みは、このような地域の組織を活かした連携で事業を推進しています。行政の役割としては、計画及び事業推進の旗振り役で、環境教育並びにインストラクター養成など教育分野の講座は、地元でこのような取り組みを生業としているサステナビリティセンターやビジターセンターのご協力を頂きながら実施しています。また、海水浴場の運営については町からの業務委託で地元観光協会にその役割を担って頂いており、運営の他、大きな役割の一つとしては、ホームページ及びSNSを活用した情報発信をお願いしており、これが誘客に繋がる大きな力であると考えています。

以上、南三陸町サンオーレそではま海水浴場のブルーフラッグ認証取得を目指した理由、そして背景にも触れさせて頂きながら、一連の取り組み等について紹介させて頂きました。取り組みや方法は地域によって様々だと思いますが、南三陸町においては人材も含めた、今ある資源を最大限活用し、これを次の世代にしっかりと引き継いでいくことを地域の共有理解として持っています。皆さん共通の思いは、スライドでご紹介しております通り、この子どもたちの笑顔そして風景を残していきたい、これに尽きると思います。

地域とともに



©2023 MINAMISANRIKU

④ 菖蒲田海水浴場

一般社団法人七ヶ浜町観光協会
事務局長 郷古明頌氏



■七ヶ浜町とは？



七ヶ浜町は東北／北海道で一番小さな町で、名の通り七つの浜の部落の名前で“七ヶ浜”と言います。日本三景の松島湾に面しており景観条例が掛かっており、開発されずそのままの自然な風景が広がっています。そのことから海に面した日本外国人三大避暑地「高山」や今年で135周年を迎えた東北最古の海水浴場「菖蒲田海水浴場」などがあります。東北の拠点である仙台市街からは車で30分の距離であることや新鮮な魚介類が水揚げされることもあり、春～秋にかけて多くの方で賑わっています。

■この先の町の観光事業を見据えて

震災以降、東北の各市町村はどうやって復興を成し遂げるかが課題でした。海水浴場や海岸線は復旧しましたが、その先の観光事業の発展の見通しは厳しい状況でした。行政と話し合った結果「海が長所」という認識は合致していたので、我々は「海のブランディング」を推し進めることに決めました。その時に出会ったのが国際環境認証「ブルーフラッグ」です。観光はどの分野でも絡められるので、今回は環境の切り口で進めていくことにしました。

■ブルーフラッグ認証取得へ



綺麗な海、楽しい海という理念は元からありましたが、誰でも利用できる持続可能な海というのは正直欠けていました。このブルーフラッグ認証取得で大いに前進したのはこの「当事者の環境教育及びユニバーサルビーチ認識」です。10年先も20年先もしっかり次の世代に残していくためには我々の知識も利用者の知識もアップデートしていかなければならないため、まずはそれを伝えられるように勉強しました。現状の目標である「環境に優しく、人に優しく、海洋生物にも優しい、豊かな海／ビーチ」を目指すことになったのもこのブルーフラッグ認証があったからです。これにより我々が目指す「海の町・七ヶ浜」のビジョンができました。あくまで観光ではなく環境認証だということを再認識しました。

■信頼できる仲間、団体が増える

持続可能で魅力あるビーチ造成の一環でまずは長所であり個性でもある菖蒲田海水浴場をブラッシュアップしました。海水浴場スタッフや関わる行政部署などでブルーフラッグ理念を説明し、「安心して安全な海の確立」を研修やイベントなどで発信しました。

自分たちの観光ビジョンや情報を開示することにより、一緒に事業を行う仲間が増えていきました。これは本当に宝物ですのでこれからも一緒に、そしてもっと増やしたいと思っています。海の魅力発信研修やイベントでライフセーバー、海水浴場スタッフとの関係が夏場だけでなく、通年を通しての関係になったのも良いことの一つです。普段からのコミュニケーションが緊急対応の際の連携に繋がりますので安心安全な海という一角はここにありま

■ブルーフラッグ取得はゴールでもあり、スタートでもある。



ゴールと書いたのは、毎年審査があるからです。審査基準は毎年更新されていくので一筋縄ではいかないのですが、その1年をゴールとして振り返り、成果を見るのが大事だと思います。その成

果と反省点という伸びしろを胸に新たなスタートを切り、よりよい海を目指すということになります。

我々はこれからやれることはたくさんあり、わくわくがとまりません。愛される海を目指して頑張ります。取得を検討される皆さんへの情報提供などお手伝いできることはあると思うのでお声を掛けて下さいね。

第3部 研究報告

国際環境認証「ブルーフラッグ」が地域経済に与える影響に関する国際比較

文教大学国際学部 教授 海津ゆりえ氏

《Profile》 鎌倉在住。農学博士。有限会社資源デザイン研究所代表取締役社長、文教大学国際学部。准教授等を経て現職。NPO法人日本エコツーリズム協会理事、環境省エコツーリズム推進会議委員、鎌倉市観光協会理事等を歴任。専門：エコツーリズム論。



海津ゆりえ（文教大学／日本ブルーフラッグ協会）

それでは、海津・平田*1・片山*2による共同執筆論文「国際環境認証ブルーフラッグが地域経済に与える影響に関する国際比較」の報告をさせていただきます。

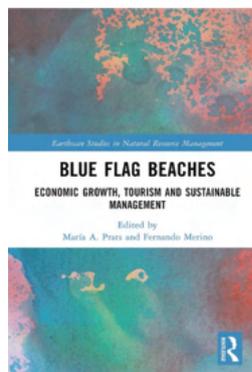
*1 東京都立大学 都市環境学部 観光科学科特任准教授 平田 徳恵氏

*2 一般社団法人日本ブルーフラッグ協会 代表理事 片山清宏

■研究の背景と目的

日本国内では現在、ブルーフラッグに関心を寄せる自治体が増加していますが、自治体ではブルーフラッグの取得によって地域にどれだけの効果をもたらされるのかが、認定取得の決め手として重要となります。経済効果を知りたいというニーズが高まっているわけですが、国内事例は分析を行うにはまだ歴史が浅く、かつ経済分野からの研究は進んでいません。そのような中で、今年8月に次の本が発行されました。「Blue Flag Beaches : Economic Growth, Tourism and Sustainable Management」(ブルーフラ

ッグビーチ 経済成長観光そして持続可能な管理)というものです。我々の共同執筆者の平田徳恵先生も一章執筆しています。この本では世界各国の事例研究を通して、ブルーフラッグがもたらす経済成長や環境保全、持続可能な観光の発展への影響を考察しており、経済、社会、環境の観点からブルーフラッグビーチプログラムが世界中で果たしてきた役割について包括的に研究を行った貴重な一冊と言えます。そこで今年の研究報告では、この本を参考に、ブルーフラッグが地域経済に与える影響に関する海外事例をご紹介します。なお、本報告は、現在編集集中の文教大学湘南総合研究所『湘南ジャーナル』の2024年春号に掲載予定のものです。



*BLUE FLAG BEACHES—
Economic Growth, Tourism and
Sustainable Management*
Edited by
María A. Prats and Fernando Merino
編、
2023年8月16日 Routledge発行

■世界と日本のブルーフラッグ普及の現状

さて 2023年現在世界では51カ国5,036のビーチフラッグが取得されています。ブルーフラッグ取得数の多い国5カ国を挙げると、スペイン、ギリシャ、トルコ、イタリアそしてフランスです。これらの国々は1980年代から1990年代の間にブルーフラッグの取得を開始しました。

最も古いブルーフラッグ取得国はフランスで1985年です。表1にブルーフラッグビーチの2022年・2023年の取得数を挙げておきました。これら5カ国は、どのような理由でブルーフラッグを取得したのでしょうか。本書によると、フランス、スペイン、ギリシャ、イタリアがブルーフラッグに参加した目的は、環境保護や環境保全でした。トルコは発展途上国として観光産業の振興を図りたい、そして持続可能な観光を促進したいということからブルーフラッグに参加しました。特に特徴があるのがギリシャです。ギリシャでは、ウミガメの生息地の保護や砂丘の修復、沿岸地帯の保護など、具体的に守りたい場所があってブルーフラッグを取得した、という明確な目的がありました。それに対し、トルコは観光活動の魅力向上のためにブルーフラッグを取得しています。

本書では、これらの国がブルーフラッグプログラムを開始した当時に抱えていた課題や状況についても述べられています。スペインやギリシャは費用負担を課題としていました。それがブルーフラッグ取得の継続性の課題となり、途中で運営主体が交代するなどの方法で解決してきました。イタリアやトルコはブルーフラッグの地位が地域内外で確立しており、ブルーフラッグを環境パフォーマンスの向上のためのツールとして認識しています。フランスはブルーフラッグプログラムの創設国ですが、5カ国の中では唯一ブルーフラッグ取得ビーチ数が減少しており、このプログラムそのものを見直していく時期にあることが伺えます。

表1 5か国のブルーフラッグビーチプログラム開始年とBFビーチの数

	国名	スペイン	ギリシャ	フランス	イタリア	トルコ
BF開始年 ^{a)}		1987	1987	1985	1987	1993
2022年取得数計 ^{b)}		621	581	419	427	531
2023年取得数計 ^{c)}		629	616	406	458	551

a) 石井 (2001)・Zeliha Eser et al.(2023) b) Zeliha Eser and Selay Ilgaz Sümer (2023) c) ブルーフラッグサイト — ブルーフラッグ (blueflag.global)

■ブルーフラッグによる経済効果

それでは本題の経済効果把握の試みについてご報告します。5カ国の中で、経済分析を行っていたのはスペインとフランスの2カ国だけでした。このうちスペインでは、バレンシア地域、ここは最もブルーフラッグの取得数が多いエリアですが、この地域の2013年から2019年のデータを用いて、部分最小二乗法という統計手法で分析を行っています。細かい手順は省きますが、観光目的地(デスティネーション)におけるブルーフラッグの取得数と観光インフラの量(ホテルやアパートなどの部屋数)には正の相関があるということがわかりました。しかしこれは、ブルーフラッグビーチ自体が大規模な観光地域に集中していることを示しているのかも知れないと本書では述べています。また、ブルーフラッグ取得ビーチ数と住民一人当たりの所得の間には負の相関があることもわかり、観光開発が必ずしも住民の生活向上につながっているというわけではないということも示唆しています。このことから、スペインではブルーフラッグが観光目的地の観光開発を促すことはあるとしても、それによって自動的に住民一人当たりの収入増加に繋がるわけではないということが明らかとなりました。

次にフランスにおける経済分析についてです。フランスでは国内の地域ブロック間で、ブルーフラッグビーチの比較をしています。こちらも統計手法の説明は省きますが、分析の結果、コートダジュールやオクシタニーなどの、多くのブルーフラッグビーチを持つ地域よりも、例えばブルーフラッグビーチが一つしかないコルシカ島や3つしかないイル・ド・フランスの方が効率的に観光要素を活用できているということが明らかとなりました。ブルーフラッグの取得数が観光効率に寄与しているとは言い切れないということを示唆しています。観光効率とは、従業員やホテルの収容人数など投資の部分と観光客の到着数や観光税による収入などの効果の関係を意味しています。

以上の2カ国の結果ではありますが、期待したような、明確な経済効果が提示されたわけではありませんでした。本書にも記載がありますが、ブルーフラッグによる経済効果測定における指標の選定には困難さが存在することが示唆されました。また観光による経済効果とブルーフラッグによる経済効果は明確に区分できるものではないことも、明らかとなりました。

■本研究から見えてきた展望

今回ご紹介した海外事例を参考にすることで、日本国内でもブルーフラッグによる地域経済への影響についての調査研究が進む可能性があると言えます。特に、海外の先進地域において、ブルーフラッグによる環境に対するポジティブな影響を高く評価していることは、経済を重視しがちな日本のブルーフラッグ取得ビーチに対して、効果を見つめ直すきっかけを与えるものと考えます。一方で、ブルーフラッグによる経済効果の測定手法は開発途上にあり、研究を続ける余地が多く残されているということもわかりました。

私たちは過去3本の研究論文を発表してきています。今回の研究とこれまでの研究から次のことを提言したいと思います。

- ①日本と同時期にブルーフラッグを取得した海外の事例や日本と同規模の海外事例との比較をすることには意義があること、
- ②日本のブルーフラッグビーチでは地域社会の内部に社会関係資本を生み出す力が見出されましたが、このような知見は世界に還元する価値があると思われること
- ③今後海外のブルーフラッグ取得ビーチとの共同研究を行うことには意義があるだろう、ということです。

以上で報告を終わりとさせていただきます。この論文の執筆に当たって翻訳作業にご協力いただいた日本ブルーフラッグ協会の西尾英子さんに深く感謝いたします。ご清聴ありがとうございました。

第4部 日本ブルーフラッグ協会賞授与式

■日本ブルーフラッグ協会賞とは

日本ブルーフラッグ協会が年に1回主催する賞で、ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を遂げられた方々並びに今後の活躍が期待される方々(団体を含む)に贈られます。

第2回日本ブルーフラッグ協会賞受賞団体

須磨海水浴場

【受賞者】
神戸市

【受賞理由】

神戸市「須磨海水浴場」は、2016年4月にブルーフラッグ認証を取得され、持続可能で魅力的な地域づくりを進めてきました。行政を中心に企業、関係団体、市民が連携した環境美化活動、環境教育活動、安心安全なビーチづくり等の取組は、他のブルーフラッグビーチの模範となるものです。特に、障がい者向けのトイレ・シャワー・更衣室を整備し、水陸両用車椅子・スロープ・ビーチマットを設置するユニバーサルビーチプロジェクトは、障がい者だけでなく、子どもやお年寄りなど、全ての方に安心して海を楽しむ環境を整備する活動であり、その成果は顕著です。本活動は、2023年の『北半球ブルーフラッグ認証におけるベストプラクティス賞』で世界2位に選ばれ、他のブルーフラッグビーチに先駆けた取組として、今後、国内のみならず世界への展開が期待されるものです。以上の取組により、神戸市は2019年の初取得以来5年連続でブルーフラッグ認証を更新し続け、国内のブルーフラッグの普及推進に多大なる貢献をし、日本の海環境保全と持続可能な社会の発展に寄与されていることから、ここに第2回日本ブルーフラッグ協会賞をお贈りし、表彰いたします。

受賞団体からのスピーチ

神戸市 港湾局 海岸防災課
課長 今西博英氏



この度は「日本ブルーフラッグ協会賞」を頂戴することとなり、誠にありがとうございます。これは偏に日本ブルーフラッグ協会をはじめ、関係団体に貴重なご助言、ご指導をいただくとともに、地域団体の皆様にご協力をいただいた賜物であり、心より感謝申し上げます。

神戸市では、子どもやお年寄り、また障がいのある方など、全ての方が安心して海を楽しめる海水浴場を目指しています。海水浴期間中は、障がいのある方も海を楽しめるように、トイレ・シャワー・更衣室を備えた施設を配置し、須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの皆様が、水陸両用車椅子・スロープを設置するなどの運用を行って頂きました。実際に水陸両用車椅子で初めて海に入られた方は、非常にいい笑顔をされていました。運用面で、ご尽力頂いた須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの皆様改めて感謝申し上げます。

神戸市の「須磨海水浴場」は、阪神間に残る唯一の自然海岸でJR神戸線須磨駅前にあります。古くから「須磨の浦」として親しまれてきた須磨海岸は、白砂青松の美しい海岸で、自然環境・水産資源も豊かな海として有名です。また、海岸に隣接する海浜公園では、神戸須磨シーワールド、神戸須磨シーワールドホテルが来年6月にオープン予定で、更なる賑わいが見込まれます。

振り返ると、須磨海水浴場は、ビーチの治安が悪化していた時期があり「須磨海岸・海水浴場の健全化の推進」「海岸の環境保全や安全性の向上」を目指して活動を開始しました。健全化や再整備の取組みへの評価指標として、ブルーフラッグ認証取得を目指すきっかけとなりました。

健全化は着実に進んでおり、今では、地元の子もたちが気軽に遊びに来る場所となっています。併せて海岸再整備事業としては、遊歩道や砂浜へのスロープ、誰もが利用しやすいトイレの整備、防犯カメラやフットライトの設置等を行い、「四季を通じて憩い、集い、賑わう海岸づくり」に取り組んでいます。

また、海水浴期間中は、須磨ユニバーサルビーチプロジェクトの皆様のご協力により、砂浜にビーチマットを設置し、車いすでも波打ち際まで行けるようになりました。

今後も、美しい須磨海岸を持続していくためには、地元の市民漁業者、地域団体の皆様との協力が何よりも必要であり、行政と地域が一体となって須磨海岸を守り育てる取組みを継続してまいります。

事例紹介

特定非営利活動法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクト
理事長 木戸 俊介氏



■須磨ユニバーサルビーチプロジェクトご紹介

須磨ユニバーサルビーチプロジェクト(須磨UBP)とは、神戸・須磨海水浴場を拠点に、ユニバーサルビーチを展開している活動です。2017年5月に初めてビーチマットを敷き、2023年夏で6回目の夏を終えました。

ユニバーサルビーチとは、障がいに関係なく、みんなで海を楽しむことができるビーチです。ビーチマットや、水陸両用車椅子などのアイテムを活用し、ユニバーサルビーチを実現しています。2017年に、神戸市も須磨海岸でのブルーフラッグ認証を目指していたこともあり、その後は、神戸市や、地域のステークホルダーと連携しながらプロジェクトを推進しています。



【生の感情、最大切に。】

人生初海水浴を経験した女の子。人生初のチャレンジは、こんな表情を生みます。一緒にいたお父さん、手足も入れるなんて思ってもなかったの、海水/リッツを忘れてきました。でも、子どものこんな表情をみて、後悔です。思わず私服のまま海に飛び込んできました。笑そんな、「言葉では表現できない」感情が生まれることがあります。

できた！経験は自信を生みます。自信は次のチャレンジを生みます。チャレンジは成長を生みます。チャレンジのキッカケをつくる。それが私たちのミッションです。

我々のミッションは、「みんなのできないをできた!に変える」というスローガンにあるように、海水浴や、他アクティビティなどの「チャレンジ」を通して成長していくキッカケづくりをしていくことです。

人生、初海水浴にチャレンジしたお子さん。笑顔が爆発していました。

一緒に来ていたお父さん。一緒に海に入れると思っていなくて、水着を持ってきていませんでしたが、海に浮かぶ子どもの笑顔を見て、私服のままザブザブ!と海に入ってきたことがありました。

そんな風に、チャレンジには、言葉では説明できないような、喜怒哀楽の感情が爆発することがあります。それを、我々は「生の感情」と表現しますが、生の感情があふれ出すようなチャレンジ・・・それが、海水浴というチャレンジを通して、我々が提供したい価値です。

■須磨UBPの成果と課題

【成果】



2023年、須磨ビーチが「ブルーフラッグ認証ベストプラクティス賞」で世界2位の名誉な賞をいただきました。

WEB上で公開された須磨ビーチの写真は、海を楽しむ人たちの笑顔の写真でした。

ユニバーサルビーチの実現のためには、もちろんハード面の整備は欠かせません。

ただ、それ以上に大切なことは、人の心とか、人のサポートに象徴されるソフト面だと考えています。参加する人はもちろん、サポートする人たちの笑顔が実現できるビーチでありたいと思います。

我々が大切にしている、アクションプランの1つに、「みんな」でつくるユニバーサルビーチ」という言葉があります。

“みんな”というのは、2つの意味があります。

1つは、「みんな」=たくさんの人。

須磨ビーチでは、ユニバーサルビーチの利用者は、2017年に活動を始めてから、コロナ禍を除いて年々増加しています。2023年は、112組、513名(過去最高)の方が利用されました。

もう1つは、「みんな」=色々な立場の人。

我々のプロジェクトは、2017年に、12人の有志によってスタートしました。

障がい当事者、家族、海の家オーナー、行政マン、看護師、ライフセーバーなど、様々な立場の仲間が、それぞれに持っている強みを生かして、苦難を乗り越えてきました。

活動途中には、こんなことがありました。

当時はなかった更衣室を、地元店舗のあったアウトドアメーカーのデカトン社様より“Que chua(ケシュア)”ブランドのタープメントをご提供いただくことで、更衣室を実現しました。

「車イス上で着替えられないので、着替えるためのベッドが欲しい。」という相談に対して、エステティシャンの方からベッドをご提供いただき、テント更衣室用のベッドとして生まれ変わりました。さらに、「着替える前に、シャワーで海水を流したい。」という悩みに対して、地元・須磨の海で漁業を営む漁師さんから200ℓのタンクをいただいたことで、船長お手製シャワーが誕生しました。しかも、太陽の陽に当てていると、それだけで温水シャワーになる、というオマケつき。笑

こうした化学反応が起きる面白さも、“みんな”でつくるユニバーサルビーチの醍醐味です。

●実現したアクティビティ

今では、車椅子のまま体験可能な『ユニバーサルメガSUP』で車椅子×SUPを実現しています。他にも、地元漁師さんとコラボし

て開催する『ユニバーサル地引網』のアクティビティも定番化しました。車椅子ユーザーでも参加することができます。

【課題】

須磨UBPは、須磨ビーチを素晴らしいユニバーサルビーチにすることももう1つ、日本全国にユニバーサルビーチを普及させることをミッションとしています。

現時点で、「きょうだいプロジェクト」と称して、連携・協力するプロジェクトが日本全国に9か所あります。しかし、まだまだユニバーサルビーチを実現するビーチは少なく、障がいのある人にとって、海や海水浴はハードルの高い遊びになっています。我々の目標は、2037年に47都道府県全てでユニバーサルビーチを実現することです。新たに加わる予定の、現在調整中のきょうだいプロジェクトを併せても、まだ10数か所です。今後、更に全国にユニバーサルビーチを広げ、みんなの選択肢を広げていきたいと思いを。

2024年1月18日、日本ブルーフラッグ協会代表理事の片山清宏が神戸市港湾局を表敬訪問しました。



神戸市港湾局 長谷川局長(左)と日本ブルーフラッグ協会代表理事 片山



海を守り、未来をつくる

第4回 BLUE FLAG Japan サミット 2023 オンライン開催

ブルーフラッグとは、国際NGO FEEが実施するビーチ・マリナー・観光用ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際環境認証制度です。ビーチの認証基準は、①水質、②環境教育・情報、③環境マネジメント、④安全性・サービスの4分野、33項目。現在、世界51ヶ国、5,036ヶ所が取得。日本国内では10ヶ所の海水浴場と、1ヶ所のマリナーが取得しています。しかし、各地域が抱える海水浴場やマリナーの課題は多様で、各地域では試行錯誤しながら毎年更新しています。そこで、この度、国内11地域のブルーフラッグ認証海岸・マリナーの関係者が一堂に会して認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有するとともに、国内におけるブルーフラッグ認証地域の普及による海辺からのSDGsの実現に貢献することを目的に「BLUE FLAG Japanサミット2023」を開催します。

プログラム

第1部 8:30~

● 開会 / 主催者挨拶

オンライン参加可能



片山 清宏 [一般社団法人日本ブルーフラッグ協会 代表理事]

藤沢生まれ。厚木市役所、イギリス・スウェーデン海外研修派遣、神奈川県庁を経て松下政経塾に入塾。2011年NPO法人湘南ビジョン研究を設立、理事長に就任。海の環境問題に取り組み。2020年「かながわ地球環境賞」受賞。慶應義塾大学SFC研究所上席所員。総務省地域力創造アドバイザー。

● 基調講演 「Z世代が切り開くサステナブルな社会 ～海の問題の解決に向けた創造的な活動とは」



齋藤 克希氏 [一般社団法人サステナブル推進協会 NAMIMATI 代表理事]

鎌倉在住。日本外国語専門学校卒業後、高級アパレルブランドに就職。社会課題への関心から退職し、2020年任意団体を設立。2022年6月にサステナブル推進協会NAMIMATIへと名称を変え、代表理事に就任。Z世代を中心に関西・関西・東海・シアトル支部合わせて200人以上のメンバーが活動。

第2部 9:00~

● 活動紹介 「ブルーフラッグ取得ビーチにおける新たな取り組み」



事例① 興津海水浴場

勝浦市観光協会
事務局長 西村 真一氏



事例③ サンオーレそでま海水浴場

南三陸町
商工観光課長 宮川 舞氏



事例② 小田の浜海水浴場

気仙沼市観光協会
千葉 光氏



事例④ 菖蒲田海水浴場

七ヶ浜町観光協会
事務局長 郷古 明顕氏

第3部 10:00~

● 研究報告 「ブルーフラッグの地域経済に与える影響に関する国際比較 ～フランス、イタリア、スペイン、トルコ、ギリシャの調査結果から」



海津 ゆりえ氏 [文教大学国際学部教授]

鎌倉在住。農学博士。有限会社資源デザイン研究所代表取締役社長、文教大学国際学部准教授等を経て現職。NPO法人日本エコツーリズム協会理事、環境省エコツーリズム推進会議委員、鎌倉市観光協会理事、一般社団法人日本ブルーフラッグ協会理事等を歴任。専門：エコツーリズム論。

第4部 10:20~

● 優良事例表彰 「第2回 日本ブルーフラッグ協会賞」表彰式



一般社団法人
日本ブルーフラッグ協会
Japan Blue Flag Association

日本ブルーフラッグ協会賞とは、日本ブルーフラッグ協会が年に1回主催する賞。ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を挙げられた方々並びに今後の活躍が期待される方々（団体を含む）に贈られます。

第5部 10:40~

● ブルーフラッグ説明会 「ブルーフラッグ取得を検討される皆様へ」

対象者：ブルーフラッグに関心があり、取得に向けて検討したい自治体、団体、企業、関係者の皆様

● 閉会（11:30終了）

お申し込み
お問い合わせ

申込方法：以下メールに参加者の「所属」「氏名」「メールアドレス」をお送りください。ZoomのURLをお送りします。

一般社団法人 日本ブルーフラッグ協会 サミット事務局

HP

<https://blueflag-japan.org>

mail

info@blueflag-japan.org

tel

090-9017-2459

みんなでキレイな海を取り戻せ!海の環境教育ゲーム

『BLUE OCEAN』



海の環境教育ゲーム『BLUE OCEAN』は、NPO法人湘南ビジョン研究所が開発した、海の環境問題と解決策について楽しく学ぶためのボードゲームです。

各プレイヤーは、海に関わるステークホルダー（関係者）と協力し合い、複数のプロジェクトの実行を通して海の環境問題を解決していきます。ミッションは、海辺の国際環境認証「ブルーフラッグ」を取得し、キレイで安全・安心で豊かな海を取り戻すこと。『BLUE OCEAN』ボードゲームは、海の環境問題を自分ごととして捉え、解決に向けて自らアクションを起こす人を増やすことで、海の環境問題を解決することを目指しています。

企画・制作：

NPO法人湘南ビジョン研究所 理事長 片山清宏

制作ディレクション：片山久美

ゲームデザイン支援：荒木勇輝、上原一紀

ビジュアルデザイン：granewdesign

協力：一般社団法人日本ブルーフラッグ協会

助成：日本財団「海と日本プロジェクト」



海の環境教育ゲーム『BLUE OCEAN』の詳細は、NPO法人湘南ビジョン研究所までお問合せください。



海辺の国際環境認証ブルーフラッグ

ブルーフラッグは、国際NGO FEE（国際環境教育基金）が実施するビーチ・マリーナ・観光用ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際認証制度です。①水質、②環境教育と情報、③環境マネジメント、④安全性・サービスの4分野、30数項目の認証基準を達成すると取得でき、毎年審査を通じて、ビーチやマリーナ等における持続可能な発展を目指しています。



一般社団法人
日本ブルーフラッグ協会
JAPAN BLUE FLAG ASSOCIATION

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会は、日本で唯一のブルーフラッグ取得支援を専門とする団体で、日本のブルーフラッグ運営組織である一般社団法人JARTAと連携し、ブルーフラッグの取得支援及び普及促進を通じて、海辺からのSDGsの実現に貢献するとともに、日本の海の豊かさを守り、持続可能な社会の発展に寄与しています。



SHONAN
VISION

Social Magazine

Vol.61
2024.02

PUBLISHER: 片山清宏

EDITOR: 一般社団法人日本ブルーフラッグ協会

ART DIRECTOR: 大戸千尋

COVER PHOTO: 一般社団法人勝浦市観光協会

湘南ビジョン研究所

web <https://shonan-vision.org/>

f @shonanvision

✉ info@shonan-vision.org

☎ 090-9017-2459